

チェルノブイリの子どもたち

チェルノブイリ子ども基金NEWS No74 2008年9月22日発行



“2008年夏 甲状腺手術後の子どもと 腫瘍病の子どものための特別保養”

ベラルーシ 子ども健康回復センター「希望 21 (ナデジダ)」

「また来年も来たい！」 今年も皆様の募金のおかげで子どもたちを保養に招待



折り紙で作ったメダル



お手玉作り

ありがとうございました。それぞれが楽しい思い出をたくさん抱えて帰って行きました。

“ 甲状腺手術後の子どもと腫瘍病の子どものための 夏の特別保養 ”

ベラルーシ 子ども健康回復センター 「希望 21(ナデジダ)」

実施期間：2008年8月1日～8月18日

参加団体：「チェルノブイリのサイン」「困難の中の子どもたちへの希望」

参加者：甲状腺手術後の子ども、脳腫瘍、白血病など血液の病気、リンパ系の病気、他の腫瘍病の子ども。8歳～18歳、62名。

引率者4名、ボランティアの若者4名（昨年まで開催していた「甲状腺手術後の子ども・若者の保養」参加者から）

費用：1日当たり16.4ドル×70名×18日間
=20,664ドル（2,221,380円 @107.5）

その他、センターまでの交通費、保険代を支援しました。

<初めて受け入れた腫瘍病の子どもたち>

昨年までの参加者は、甲状腺手術後の子どもと若者が中心でした。しかし、小児甲状腺ガン発症のピークが過ぎ、脳腫瘍や血液の病気の子どもたちが増えていることから、今年は初めて他の病気の子どものたちも保養に招待しました。子ども基金にとってもナデジダにとっても、このような病気の子どものたちを多数受け入れるのは初めての経験でした。ベラルーシ各地からやってきた子どもたちはほとんどが初めて会うもの同士で、このセンターに来るのも初めてでした。親たちの中には病気の子どものを18日間手放すことに不安を抱く人もいました。しかしセンターの職員たち、引率の大人たち、また昨年まで保養の参加者だったボランティアの若者たちの協力のおかげで、子どもたちは元気にのびのびと過ごすことができました。

<センターでの毎日>

保養期間中、毎日子どもたちのためのさまざまな教室や催し物が行なわれました。手芸・木

工細工・シンセサイザー・コンピュータなどの教室、サッカー・卓球・バレーボールなどのスポーツ大会、歌や芝居のコンクール、野外での催し物など、子どもたちはさびしがったり飽きたりすることなく、いつも何かに熱中することができます。健康に対するケアも万全です。センターの農場でとれた安全な野菜を中心とした健康に配慮された食事が出され、歯科治療の他にそれぞれの子どもの健康状態に応じて、マッサージ・薬草茶・アロマテラピー・温浴療法などが行なわれています。保養の最初と最後には医師による健康診断が行なわれ、診断結果はそれぞれの子どもたちが持ち帰れるようになっています。

<子どもたちの変化>

この保養の結果、体の健康面だけでなく、心の面でも大きく変化した子どもがいました。センターには専門の心理療法士がいます。職員たちと連携して子どもの心のケアに務めています。参加者の15歳の男の子は脳腫瘍の手術後、手足の運動機能障害が残り、記憶力も低下するようになったため、強いコンプレックスを抱えていました。保養が始まったばかりの頃、いつも一人でぼつんとしていたこの男の子は、次第に



他の子どもたちと接するようになり、最後には仲間と一緒に笑う姿を見ることができました。腫瘍のため右眼球摘出手術を受け義眼を装着している物静かな18歳の青年。彼は決められた治療を受ける以外は、いつも部屋でひっそりギターを弾いていました。しかしだんだんと親しい友人ができ、最後には舞台の上で堂々とギターの弾き語りをするようになりました。彼の内面に大きな変化があったことは、その表情を見れば一目でわかりました。来たばかりの頃は顔色が良くなかった貧しい家庭の10歳の女の子は、次第に友だちと笑ったり走り回ったりするようになり、見違えるほど元気な姿になっていきました。

今回ボランティアとして参加した22歳の青年は、「甲状腺手術後の特別保養」に11年間毎年参加してきました。あまり人前に出ることを好まなかった彼は、2年程前から舞台上で歌や芝居を披露するようになっていました。今年は子どもたちの面倒をみたり、センターの催し物の企画・進行を務めたりしました。子どもの頃の内気な彼からは想像もつきません。ナデジダという場所が、こんなにも人の心を開かせ新しい可能性を見出してくれるということを、彼を通して改めて感じます。

最終日に15歳の女の子がこう挨拶しました。「ここに来てたくさんの友だちができました。私たちを気遣ってくれる人たちがいることも知りました。私はもう一人ではないと感じました。保養に招待してくれた日本の皆さん、ナデジダ



のスタッフの皆さん、引率者の皆さん、本当にありがとうございます」

<日本の教室>

特別保養の期間中、日本人ボランティアによるさまざまな教室が開催されました。

富永安子さん：8/3~8/5 小寺隆之さん・小寺美和さん・福田実枝子さん：8/15,16 折り紙教室 佐々木：8/3~8/5、8/11~8/17

富永さんはお手玉・指編みマフラー・折り本作り・絞り染めの教室を開きました。どの教室もいつも定員いっぱいで大盛況でした。教室が終わってからも自分で作ったお手玉を肌身離さず持ち歩き、いつも練習をしている男の子たちがいました。遊びすぎて縫い目がほつれたお手玉を、修理してほしいと持ってきたりしました。指編みでは小さな子も、男の子たちも自分のマフラーを編みました。自作の折り本には日本語の文字を書くことが流行りました。白い布におはじきや楊枝を巻き込んで輪ゴムでしばり染色していく絞り染めは、輪ゴムをほどいた時のさまざまな色や模様で大喜びでした。マフラーも、絞り染めで作ったスカーフも、そのあと身につけている子がいました。

富永さんの帰国後、揃えていただいた材料を用いて次の教室を開催しました。折り染め(和紙)・折り紙・指編みマフラー・紙で作るスプリングのおもちゃ・手作りカード(ペーパークイリング)。前半に富永さんと共に開催した教室



に参加した子どものうち、私の助手役をしてくれる子どもたちが現れ、大変助かりました。材料を配ったり、苦手な子どもに教えたり、後片付けを手伝ったりしてくれました。ペーパークイリングは、細い紙を切ったり巻



いたり貼り合わせたりする細かい手作業です。普段はにぎやかな子どもたちもしーんと静まり返り、真剣に取り組んでいました。ナデジダのスタッフも引率の人たちも、いつもとは違うその様子に驚いていました。子どもたちは新しいことに挑戦し、自分で作品を完成させる喜びを感じているようでした。出来上がったカードはお父さんやお母さんのお誕生日に渡す、という子どももいました。折り紙が気に入った男の子たちは、教室が終わった後も自分の部屋や外のベンチなどでいろいろなものを作っていました。そんな子どもたちのまわりにはとても穏やかな空気が流れていました。(報告：佐々木真理)

【保養参加者たちの感想】

このセンターではみんながお互い家族のような関係でした。私たちの世話をしてくれた引率者の方たちは、私の二人目のお母さんのようになりました。どの教室でも新しいことを知りました。粘土や木工細工、それから日本の教室では折り紙が楽しかったです。指編みは小さな男の子でさえ興味を持って取り組みました。こんな素晴らしい施設がベラルーシ各地にもっとあったらどんなによいだろう、と思います。(G・アーニャ 女・15歳)

この18日間はあっという間に過ぎました。新しい友達ができて楽しかったです。私たちのために実にたくさんのコンクールやスポーツ大会などの催し物がありました。ボランティアのローマとガーリャ、ナデジダのスタッフ、私たちの世話をしてくれた大好きなリュドミラさん、楽しい教室をしてくれた日本のみなさん、お部屋の掃除をしてくれた職員の方々、本当にどうもありがとうございます。私はもう一度ここへ来て健康を回復し、楽しいときを過ごしたいと思います。(S・アーニャ 女・14歳)

これまでいろいろな保養施設に行きましたが、このセンターほど素晴らしい施設は他に見たことがありません。ここでは何もし

ないでじっとさせてはくれません。それはいろいろな面白い教室や催し物があるからです。この食事も大変素晴らしいです。このセンターは僕たちが夏を過ごすのにはこの上なくよいところです。もう一度ここへ来たいです。よい保養を提供してください。ありがとうございます。(L・アレクセイ 男・18歳)

この素晴らしい保養を、日本の方々とナデジダの全職員に感謝します。僕はここがとても気に入りました。日本の教室はどれもみな楽しかったです。またここに来たいと思います。僕たちの世話をしてくれたガーリーナさんとリュドミラさんに感謝します。(C・ヤン 男・16歳)

施設そのものも素晴らしく、催し物もディスクもみんな楽しかったです。これからずっと付き合っていける友だちもたくさんできました。引率の方々、ナデジダスタッフの方々とも理解しあえて仲良くなりました。指編み・フラワーアレンジメント・アロマテラピーなどを体験しました。楽しい思い出がたくさんできました。この18日間は飛ぶように過ぎ去り、帰りたくないと思いました。(T・カーチャ 女・16歳)



ご寄贈いただきました品物を届けてまいりました。誠にありがとうございました

「希望21」へ

囲碁セットと露語版教本(4セット) 故猪股様より
絵本「ピンク色の雲」露語・英語版 宇留賀様より
大相撲カレンダー・朱鷺カレンダー 藤田様より

「希望21」特別保養参加者全員へ

日本の民話(昨年も届けました) 根松様より

里子支援を受けている子どもたちへ
サインペン等文房具

三重チェルノブイリ被曝児童救援募金様より



'08年6月 ベラルーシ訪問

報告 佐々木 真理

ゴメリ市の「困難の中の子どもたちの希望」は、甲状腺ガンや腫瘍病の子どもを会員にもつ慈善団体です。今年4月時点での会員(2歳～17歳、219名)の内訳は以下のようになっています。小児甲状腺がんのピークは過ぎたものの、他の病気の新たな会員は増えています。訪問したとき代表のワレンチーナ・パホモワの机の上には、背中に大きな皮膚がんが現れている生後数ヶ月の女の子の写真がありました。

病名	人数
甲状腺がん	26
脳腫瘍	34
網膜の腫瘍	30
肝臓がん	24
腎臓がん	22
白血病と血液病	37
女性生殖器官のがん	31
鼻咽頭のがん	12
皮膚がん	3

6年前に脳腫瘍の手術を受けた男の子(現在19歳)は、手術後に言語障害と手足の運動障害が残りしました。両親は子

どものために町の病院の近くへ引越し、治療やリハビリを続け、少しずつ回復してきていました。2年前の夏には、「希望21」の特別保養にも参加できるまでになりました。しかし今年3月、脳に新たな腫瘍が見つかり、2度の手術を受けました。その後、意識が戻らないことも続きました。8月28日の検査の結果、さらに3つの腫瘍が発見されました。もう手術が不可能な状態で、自宅に戻っています。寝たきりで話すこともできなくなっています。

長年病気の子どもたちのために働いてきたワレンチーナは言います。「私たちはみんな彼のことを祈っています。これは私たちみんなの悲劇です。“どうして子どもたちがこのような病気にかかるのか、こんな運命を背負わなければならないような罪を犯したのか”と、いつも思うのです。残念なことに、これまで私たちはほんとうに多くの子どもたちを失いました…」

V・イリヤ

2004年生まれ ゴメリ市

2007年秋に肝臓肥大が発見され、その後の検査で肝臓の悪性腫瘍と診断された。ミンスク市の小児腫瘍センターで化学療法を受け、2008年2月に手術を受け、その後さらに化学療法を受けた。イリヤの病気は放射線汚染地域に暮らしていることと関連がある、と認定された。その後も定期的にミンスクへ検査に通っている。甲状腺にも問題があり、内分泌医にもかかっている。その他にも4歳のイリヤが抱えている病気は、咽頭扁桃炎、アトピー性皮膚炎、水頭症、単核細胞増加症、鼠径ヘルニア、思春期早発症。ホルモン剤チロキシンを服用(子ども基金の支援によりゴメリの救援団体が購入している)。他にも何種類もの薬を服用している。小児腫瘍センターでの治療費・医薬品代は無料だが、その他は自分で買わなければならない。大変からだが弱く、頻繁に感冒にかかるという。

ゴメリ市内で母と祖母と3人で暮らしている。母は学校の教師をしているが、子どもの看病のため、仕事を続けるのが難しくなってきた。

「病院へ通うのにも子どもの交通費の免除がなくなってしまったので、負担が大きくなりました(*1)」と話す。祖母は鉄道関係の仕事をしている。訪問時、イリヤは点滴のカテーテルとマスクを付

けていた。免疫力が落ちているため、気をつけなければいけないという。外出のときは必ずマスクをしている。化学療法の



影響で髪の毛が抜けてしまっている。

イリヤは病院へ通うときに列車に乗ることを楽しみにしている。列車が大好きで、洋服ダンスの扉を列車の扉に見立てて遊んでいた。

*1:昨年末にベラルーシの法律が改正され、障害者のさまざまな特典が削られた。

K・アーニャ

2002年生まれ ゴメリ州レチツァ市

両親と3人暮らし。両親はゴメリ州ローエフ地区の出身。地元の教育専門学校を卒業後、ブラーギン市(チェルノブイリ原発から50キロ)の学校へ派遣された。1999年から2004年まで暮らしていた。アーニャはブラーギン市で生まれた。目の腫瘍が見つかり、初めに化学療法を受けたがよい結果が得られず、2004年11月に手術を受けた。アーニャの手術後、家族はレチツァ市に引っ越した。



アーニャは手術で右眼球を摘出したため、義眼を装着している。義眼は4カ月に1度交換する。ベラルーシで義眼を作る専門病院はミンスク市に1カ所しかないため、そこまで通わなければならない。義眼は2週間に1度洗浄する。目薬や洗浄液などを購入しなければならない。

アーニャは免疫力が低くよく病気をするため、幼稚園に通うことができない。常に母が付き添ってなければならない。今年9月には小学校に入学する年齢だが、目にも体力的にも負担が大きいため、入学を来年に延長するよう医師にすすめられた。「今飲んでいるのはカルシウム

剤だけです。果物のある時期はなるべく与えるようにしています。必要に応じてビタミン剤も飲んでいきます。初めのころはいやがった義眼の交換も、もう慣れたようで痛がったりはしません」と母親。アーニャはおしゃべりが好きで、アルバムを見せながら1枚1枚詳しく説明してくれた。それが終わると「うちのお庭をみせてあげます!」と言って手をとって案内してくれた。「今はよく食べるようになり太りましたが、化学療法の後はとてもやせて髪の毛も抜けてしまいました」と母親。

以前は国から保養券をもらい、母とアーニャは国内のサナトリウムに行っていたが、今はそれがなくなったという。またアーニャの両親は、ブラーギンで教師をしていたとき、生徒の引率者として「希望21」に行ったことがある。

「困難の中の子どもたちへの希望」代表パホワ・ワレンチーナ

「ブラーギンには店も学校もあり、人も住んでいます。高濃度に汚染され住んではいけないとされている地区から10キロ離れた村の人は、移住させられずにずっと住み続けています。本当はどこもみんな避難させなければなりません。お金がないからできないだけです。

1990年頃からブラーギン、ホイニキなど人が住まなくなった家に、各地から人が勝手に住みつき始めました。犯罪者、貧困者、アルコール中毒者、麻薬中毒者なども。今は住民登録をしないと住むことができません。ローエフはブラーギンから近いですが、放射能汚染はブラーギンより少ないです。事故当時、そこには私の両親が住んでいて、母親は病院で働いていました。チェルノブイリ事故のことは5月1日に初めて知らされました。当時ゴメリにいた私は、5月4日にはゴメリから子どもを連れてボルゴグラード(ロシア)に避難し、9月までそこで過ごしました。移動中はとても暑く、飲み物も少なくて大変な思いをしました」

K・ワレーリ

1995 年生まれ ゴメリ州ペトリコフ地区コパトケヴィチ町

急性前骨髄性白血病。中毒性肝炎を併発した。2005 年 11 月からミンスクの小児腫瘍センターに半年間入院、化学療法を受けた。その後も 1 カ月に 1 度通院している。定期検査以外でも熱が出たらすぐに病院へ行かなければならない。現在は肝臓の薬を 2 種類服用している。約 70 キロ離れたモーズィリ市の病院には 1 週間に 2 回検査に行く。免疫力が低いと、公共の交通機関を使うことを医師から禁止された。タクシーで度々遠い町の病院へ行くことが負担になったため、分割払いで車を買った。障害者補償のアパートを 1 年間以上待っているが、まだ入ることができない。借家住まいをしながら、畑で野菜を作っている。ワレーリは病気のため 2 年間学校へ通うことができず、先生が家に来て勉強をしていた。数学や科学が得意で、将来は会計や経済の勉強がしたいという。病気になる前まではサッカークラブに入っていた。9 月からは学校に通う予定。「家の中だけで家族とだけいるより、学校で友達と交流したほうがよいに決まっています」と母親。父親は消防署の運転手。母親の働く寄宿学校には、知的障害の子どもや、親がアルコール依存症の子どもが多いという。

コパトケヴィチは人口 3600 人。以前は栄えていたが、今は工場などの施設がみんな閉鎖された。「2 階建ての病院が建てられましたが、

医師が足りないのであまり役に立ちません。この町の病院で検査ができればモーズィリ市まで行く必要はないのに」と父親。村には子どもや若者ための施設などが何もない。放射線汚染地域であるこの町の学校には、以前ドイツやイタリアの団体から人道支援物資が子どものために送られてきたが、今はそれもなくなった。

G・ヴィターリ

1996 年生まれ モーズィリ市



慢性骨髄単球性白血病。99 年にミンスク市の小児腫瘍センターで化学療法を受けた。現在は 2 カ月に 1 度通院している。ビタミン剤を服用。検査の結果によっては他の薬も必要。化学療法は無料だが、その後に必要な薬は自費で購入しなければならない。ヴィターリは数学と情報学が得意で、プログラミストになるのが夢。父親は以前警備の仕事をしていたが、息子の世話のために今は定職に就いていない。ミンスク市の病院へ公共交通機関で行くには、二人で往復 50 ドルほどかかる。

ヴィターリは父親と二人で暮らしている。ヴィターリが病気になってから母親は酒を飲み始めた。子どもの面倒をみないほど飲んでいたため、3 年前に親権を剥奪された。家には 1 年以上帰っていない。1 度だけヴィターリは町で母親を見かけた。「自分の前を通り過ぎたけれど、挨拶もしないで行ってしまった」と、とても傷ついた様子だった。母親が今どこにいるかわか



らない。「もし帰ってきてまた酒を飲みだしたら、病気のこの子をうちに置いておけない。一緒に暮らすのは不可能だ」と父親。今の時期、外の暑さは体調に悪いため、ヴィターリは家の中だけで過ごしているという。



ワレーリの人懐こい笑顔の後で、ヴィターリのさびしそうな顔は対照的だった。「あの年頃は、本当なら母親の愛情が一番必要なのに。あの子には甘える母親がいない」とワレンチーナ。ヴィターリの祖母も、男親一人で育てていることを心配して再婚を勧めているが、父親は

「急ぐことはない」と。私たちが帰るとき父親がアパートの下まで見送ってくれた。エレベーターホールには酒に酔った様子の男性がしゃがみこんでいた。「昼間からこれですからね…」と父親が諦めたように言った。

ワレーリとヴィターリは、2008年8月に行なわれた「希望 21」での特別保養に参加した。二人ともたくさん友だちを作り、いろいろな教室や催し物に積極的に参加した。楽しい思い出や新しいことに挑戦した自信は、必ず病気や人生の悩みに立ち向かう力になると信じた。

『ピンク色の雲』を読んで

戦争があったこと、今もどこかで戦争が行われていることを、人々は知らなくてはなりません。戦争の恐ろしさを忘れてはならないのです。記憶が生きている間は、その記憶がもたらす恐怖というものは生き続けます。 オクサーナ 16歳

恐ろしい爆弾を考え出して平和な街に落とし、何百万人もの人々の命を一瞬で奪ったアメリカ人やアメリカ軍のことを、この女性は責めてはいません。戦争という事実そのものが恐ろしいのです。そして人間は賢くなればなるほど、恐ろしい武器を作り出すものです。 ジェーニャ 14歳

この本のおかげで、戦争中、特に原子爆弾が落とされた後に人々が経験したことを知り、感じ取ることができました。それはぞっとするものです！人間はこういうことを知り、誰かが再びこんな爆弾を使おうという気を起こさないために記憶するべきです。 アンナ 14歳

この本は恐怖という感情を、あるいは憤怒とか戦慄とかいう感情を教えてくれる。人間は平和を守るためにこのことを知らなくてはならない。 アリョーナ 15歳

原子力の発明による不幸や、悲痛な恐ろしい事故は、平和なときでさえ起きています。人間たちよ、自分たちの行動と発明の責任をとることを学び、こんな武器を作ってむごいことをしないで。あるがままの世界を大事にし、平和を守って。もうこれ以上悪を行わないで。地上の生命は美しく、かけがえのないものなのだから。 ヴィタリーナ 17歳



『ピンク色の雲』 おばあちゃんのヒロシマ (副題)

宇留賀佳代子・文 稲田善樹・絵 出版社 発行所=てらいんく

税込価格 1,680円 著者の宇留賀さんより露語版・英語版を寄贈していただき、「希望 21」の図書館に寄贈し、保養中の子どもたちに読んでもらうことができました。また、売上の一部も寄付していただきました。ありがとうございました。

「ユージャンカ（南）」夏の保養

ウクライナ ニコラエフ州オチャコフ

2008年7月1日～7月14日

慈善団体「家族の救援」より、チェルノブイリ事故証明書をもつ子ども39名、引率3名

2008年7月16日～7月29日

甲状腺手術後の子どもの特別保養 子ども35名、引率3名、医師1名

費用：1日当たり17ドル×81名×14日間
=19,278ドル（2,072,385円 1ドル=@107.5）

その他、保養所までの交通費（1人当たり40ドル）を支援しました。

<特別保養引率者からの報告>

保養期間中に子どもたちは一度も病気をしませんでした。保養全体としては満足しています。子どもたちには新しい友達とたくさんの思い出ができました。大事なのはお互いの交流です。初めて参加した子どもたちには、この保養を企画し招待してくれた日本の「子ども基金」について話をしました。

保養に参加した子どもたちから：保養に招待してくれて本当にありがとうございます。皆さんのご健康と、ご活動のご成功をお祈りします。

今年は都合により、日本からスタッフ・ボランティアの参加はありませんでした。

ウクライナへの緊急医療機器支援 2台目も寄贈！

キエフの内分泌研究所・放射線部門より「超音波診断装置」

寄贈の要請を受けたのが今年の春でした。2007年のキャンペーンの一環としてみなさまに募金を呼びかけさせていただきました。まず、1台目をカタログハウス読者様からの募金により昨年7月に贈ることができました。その後もたくさんのみなさまから募金をお寄せいただき、合計で655件4,032,500円の募金が集まりました（9月1日現在）。前号では募金額をかなり超えた額の機器を提示されて、分割払いでの購入もやむなし、との決定をお知らせしました。しかし、子ども基金のウクライナ窓口「チェルノブイリの子どもたちの生存」の働きかけもあり、最終的には昨年贈った額に近い機器にすることができました。7月末に送金し、無事設置されました。（詳しい収支については15ページを参照してください）。

^^^

チェルノブイリ子ども基金の皆様

みなさまから贈られました2台目の超音波診断機「Toshiba-Nemio XGMk1」に対しまして、心からお礼を申し上げます。診断機はすでに我々のところに設置され、使用しています。

最高品質の診断機は、日常の検査のためとしてだけでなく、専門性の高い研究にも使用することができます。罪の無いチェルノブイリ被害児童に対する皆様のご援助に、改めてお礼を申し上げます。

深い敬意をこめて



2008年9月11日

内分泌研究所 所長 N・D・トロニコ
機能診断研究部門長 V・V・マルコフ
超音波診断部門長 S・I・マチャシユク

チェルノブイリをくりかえさないために

23周年救援カレンダー 2009年度版 申込受付中

「私たちのような子どもをもうこれ以上つぐらないで」
チェルノブイリの子どもたちの声が聞こえませんか？
この子どもたちの救援とともに日本の現状にも目を向けていただきたく、
2009年カレンダーには「日本の原発」もとりあげています。
ぜひ、まわりの方にもおすすめください。
同封の申込用紙にご記入の上、みなさまからのお申し込みを
お待ちしております。出来上がりは10月下旬の予定です。



8月 子ども基金が支援しているベラルーシの子どもセンター「希望21」で過ごす子どもたち



7月 砂浜で遊ぶ人たち、海で釣りをしている人たち
後方に見えるのは、関西電力・美浜原発

撮影：広河 隆一 すべてカラー
日本国内写真4点、チェルノブイリ写真10点

[神楽坂事務局だより 9/2日 ブログより抜粋]

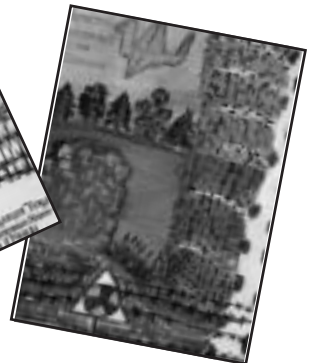
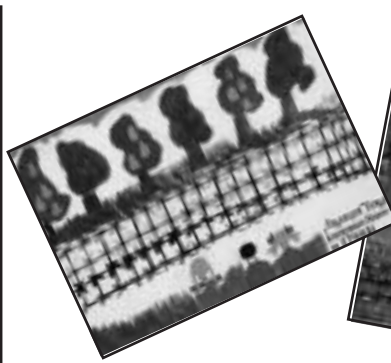
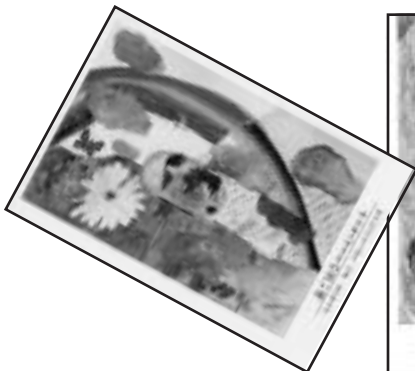
「世界の車窓から」(テレビ朝日系列他で放送)という番組では、列車は今ベラルーシを走っています。日本ではあまり知られていないベラルーシの町や自然の風景、普通の人々の様子を見ることが出来ます。9月14日は、ゴメリ州の放射線汚染地域バルトロメーエフカ村の様子が放映されました。フォトジャーナリストで「子ども基金」設立者・現在顧問の広河隆一さんがかつ

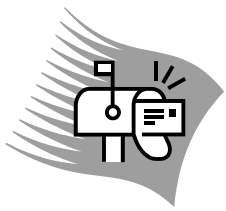
てこの村を訪れました。写真記録チェルノブイリ「消えた458の村」(日本図書センター発行)の中にその写真が収められています。現在準備中の「2009年版チェルノブイリ救援カレンダー」にも、この村の老夫婦が登場。このほか、広河隆一さんが撮影したベラルーシとウクライナの人々、誰も住めなくなった村、自然の風景などが。また、原発と隣り合わせに暮らしている日本の風景も。

ご好評をいただいている
チェルノブイリの子どもたちの描いた絵はがき。
事務局の住所変更に伴い、住所欄を消しています。
そのため今回大幅に値下げしました。

絵はがき

10枚入り 500円のところ
半額 250円!





ミンスク便り



9月になり、休暇を終えた人たちが町に戻ってきました。道路には車も増え、地下鉄やバスの運行も、休日並みの間隔だった夏ダイヤから、冬ダイヤに変わりました。今回は、ミンスクの町を走る乗り物についてお話ししたいと思います。

ミンスク市民の利用する公共交通機関は、地下鉄、バス、トロリーバス、路面電車、乗り合いタクシーの5種類です。この中で、利用者数の4割を占め、最も便利なのが地下鉄です。旧ソ連で地下鉄があるのは、人口100万を超える大都市に限られ、ミンスクの地下鉄はその中でも、利用者数では第4位、1kmあたりにすればモスクワに次ぐ第2位とかなりの規模です。ミンスクの地下鉄網は、北東から南西に延びる路線と、西から南東に向かう路線の二本が、市の中心部で交差しています。電車は4～5両編成でホームも短く、町の一番中心にある乗換駅を除けば、地上への出口もホームの前後左右に一カ所ずつのみ、地下道には簡単な売店が並ぶ程度と、構造は単純です。料金は乗車距離や乗り換えの有無に関わらず一律で（2008年夏現在の料金は600ベラルーシ・ルーブル＝約30円）、窓口でプラスチック製の専用コインを購入するか、磁気カード式の定期券を使用して支払います。今年9月からは、バッグやポケットから取り出さなくても読み込み可能なカード式定期券が登場しました。

地下鉄で行かれない地域をカバーするのは、地上交通機関です。バスやトロリーバス、路面電車はいずれも、複数箇所あるドアのいずれかから乗車し、車内に設置されたパンチで切符に自分で穴を開ける方式です（料金は地下鉄と同じ）。穴を開けた切符は回収されることはないため、只乗りの割合はかなりあるようです。ただ、抜き打ちの検札もあり、無銭乗車がみつくと罰金を払うこととなります。日本ではほとんど姿を消したトロリーバスですが、旧ソ連や

東欧では、道路交通量の増えた現在でも路面電車とともに現役で頑張っています。トロリーバスの運転手には女性も少なくなく、なかなか勇ましい光景です。

ここ数年で急速に路線が増えてきたのが乗り合いタクシーです。これは、最大15人程度が乗れるマイクロバスで、乗客は自分の降りる場所を運転手に告げて降ろしてもらいます。乗り合いタクシーの料金はバスやトロリーバスに比べ2.5倍以上と割高ですが、速く目的地に着くことができるメリットがあります。

地下鉄やバスを利用する際のマナーには、日本と異なるものがあります。まず、混んでいるバスや乗り合いタクシーなどで運転手から切符を買う際、お金を順繰りに渡してもらうこと。お金が運転手に届いたら、引き換えに切符とお釣りが同じようにして戻ってくる、という具合です。また、降りる際には、そばに立っている人に「次で降りますか」と聞きながら、少しずつ位置を代わってもらって戸口に近付いていくのが決まりです。これをしないで駅についてから急に人を押し分けて降りようとすると、周りの人に眉をひそめられてしまうのです。東京のラッシュ時とは比べようありませんが、人が押し合うくらいに混んでいることもあり、手荷物には十分気をつける必要があります。お年寄りや小さい子ども連れに必ず誰かが席を譲るのは、とても良い習慣だと思います。

ここ数年、今まで多く見られた古い車両に代わり、新しい車両が増えてきました。地下鉄網も少しずつではありますが、拡張されてきています。マイカー所有が急速に拡大し、道路の渋滞や駐車場不足が問題になっている今日、排気ガスを出さない路面電車やトロリーバスは環境保護の観点からも注目され、さらに便利な市民の足となることを期待したいところです。

（花田朋子 ミンスク在住）



チェルノブイリの歌声



とかく8月に広島を訪れる人というのは、広島に原爆や平和のイメージを追いもとめるものです。少なくとも僕はそういうふうにして広島に向かい、広島に着いた夜、まず足を運んだのが原爆ドームでした。人通りのにぎやかな街をぬけて、ひっそりと暗くなった川のほとりに、その瓦礫の建物はしずかにその内部を光に浮きあがらせて立っていました。見上げると、いまは鉄骨のむき出しになったその円蓋の向こうに、しずかな夜の空が見えて、あの8月6日、その空に閃いて広島街を押し潰した、まばゆい火光が想像されました。ただ、もう一度、にぎわう街中にもどれば、そこに原爆の痕跡を探すことはほとんど場違いなことのようにでした。

たしかに、8月6日にいたる数日というのは多くの人々が慰霊のために平和公園を訪れ、いくつもの平和行進やコンサートが広島街を色めき立たせました。けれど、7日をすぎると途端に街角から人が減り、それまでの熱気に広島の人のもものがどれほど交じっていたのかと訝しく思うほど街頭の雰囲気は変化しました。それは当初おどろきでしたが、考えてみると当たり前のことでもありました。広島には63年かけて築いた日常生活があり、8月6日を終えて広島はもとの街にもどったのでした。よそから突然やってきて、やれ原爆だ平和だと騒ぐ者にはそれが見えなかったのです。市内の平和資料館を回ってみるとその職員からさえこんな声が聞かれました。「いつまでも昔のことを言っていてしょうがない」63年という歳月の長さは広島の人のもっともよく感じているものだと気がつきました。

そんな広島で外部の者が被爆者の話を聞ける機会は非常に限られていました。その一つ、原爆資料館の地下で被爆証言講話会という催しが開かれていて、そこではいまの広島街をただ見て回っているだけではとても知ることでできないあの日以降の広島が被爆者によって決して多くはない聴衆を相手に語りかけられていました。話し終えて彼らは最後にこう言いました。「自分のような人間がふたたび現れないよう、同じ過ちを繰り返さないでください」それ

は昔のことを言っているわけではありませんでした。それから、長崎に原爆が落とされた日の夕方、疲れて原爆ドームの対岸を歩いていると広島若い人が数人あつまってキャンドルナイトを開いていました。その主催者で被爆3世という女の子が教えてくれました。「いま知り合いの被爆者のお婆ちゃんが脳みそからくるぶしまで全身ガンにかかっている4時間おきにモルヒネを飲んで痛みを耐えている。それでも調子の良いときには証言活動をしている。そんな爺ちゃん婆ちゃんが生きているうちに一つでも多くの核兵器をなくしたい。だけど、原爆のことでイベントをやっても若い人がこない」

外から広島を見ている人は、広島に原爆や平和のイメージをもとめ、その先に勝手な希望を見出そうとしがちです。少なくとも僕はそうでした。しかし、実際の広島ではそのイメージは年々小さくなり、もしそこに希望が見出せるとすれば、それは被爆者自身とそれに連なる人たち、多くは被爆2世、3世の人たちの個人的な努力によって精一杯に保たれている希望でした。そして、その平均年齢が75歳をこえた被爆者にとってそれは、あと10数年のうちに叶えられねばならない急がれる希望でした。原爆ドームは残っても、それはただ黙って眺めていては消えてしまう切実なものでした。 津布久 賢三郎



広河隆一 撮影

「子ども基金」ボランティアスタッフの津布久さんは大学生です。夏休みを利用して、広島を訪れました。

「子ども基金」の支援を受けている子どもたち・学生たち

チェルノブイリ事故被害者の医学生が来日
(2008年8月1日～14日)

「チェルノブイリ原発事故の放射能の影響で小児甲状腺がんを患い甲状腺の摘出手術を受けた3人の医学生が、ベラルーシから来日した。3人は長崎・ヒバクシャ医療国際協力会に招かれ、日赤長崎原爆病院などで被爆者医療の研修を受けた。研修では甲状腺の摘出手術などを見学し、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館での公開セミナーでは、原爆被爆者や市民と意見交換を行った。8/9には長崎の平和祈念式典に参列した。(2008/08/05 西日本新聞より)」

3人は私たち子ども基金の支援を受けている学生です。ベラルーシ医科大学生の1人は、子ども基金の奨学金支援を受けており、もう1人は里親支援を受けています。2人とも子どものころから「希望21」での夏の保養に何度も参加していました。もう1人のゴメリ医科大学生もこの保養に参加していました。本人たちからの感想が届きましたらご紹介します。



子ども基金の奨学金を受けて勉強を続けてきた4人の学生が2008年6月に卒業

「チェルノブイリ子ども基金」の皆さま

僕はグロドノ国立医科大学を卒業し、国家試験に合格して医師の資格を得ました。

グロドノ国立医科大学の外科手術と局所解剖学の講座に実習教員として配置され、1年経ったら大学院に入学するつもりです。新しい手術方法についての研究を続けたいと思っています。医学についての国際的なシンポジウムや会議に参加するのが夢です。いつか日本に行き、文化や医学の進歩をもっとよく知ることができたら幸せです。皆様のご援助に感謝しています。地球の向こう側に、チェルノブイリ事故から目をそらさず、この不幸を克服するのを助けてく

れる友人たちがいるというのは本当にうれしいことです。“真の友は困ったときにわかる”という諺があります。

皆さんが不幸や病気から守られんことを！

2008年7月10日

S・ロマン グロドノ国立大学 医師・実習教員

その他、3人の学生の進路は次のようになりました。

M・ユリヤ ベラルーシ国立教育大学
歴史学部卒業 歴史・ドイツ語の教師

M・アレクサンドラ ベラルーシ国立大学生物学部卒業 ドイツ ハノーバーの医科大学に入学し、小児血液病の研究を続ける予定。

G・ターニャ ウクライナ国立医科大学卒業
インターンとして勤務



甲状腺腫瘍の手術をしたキエフのインナ

インナは14年前に甲状腺の手術を受けました。1996年の夏にベラルーシ「希望21」で初めて甲状腺手術後の子どもの特別保養を行いました。そこに参加した1人です。基金ニュース26号、27号に彼女からのお礼の手紙が掲載されています。彼女は大学を卒業したあとラジオ局に就職、その後、体調を崩して1年くらいで辞めて、学校の先生をしていました。今年になって結婚、妊娠の知らせが届きました。昨年の暮れに再発の可能性が告げられ、年明けに精密検査の予定などをたてることになっていたそうです。そもそも本人は14年前に手術を受けた際、担当医から14、5年後に再発する危険性があると聞かされており、実際にその通りになったことに相当のショックを受けているようです。

医師たちは出産をあきらめるように説得したそうですが、本人の意思は固く出産を望んでいます。10月初めごろ出産の予定ですが、無事の出産を祈るばかりです。



里親のページ



8月のベラルーシ「希望 21」での「特別保養」には、里親から支援を受けている子どもたちも参加していました。里子から託された手紙などとともに、保養中の子どもたちの様子を里親の方に報告することができました。

里親からの感想

写真で見る限りワレーリ君は元気そうで

楽しんでいるのが伝わってきました。そして私もがんばらなくては、と逆に元気をもらいました。ワレーリ君をはじめ、参加した子どもさんたちが皆元気になってくれることを祈っています。(里親 H・Iさん)

ベラルーシに行かれた様子、うれしく拝見いたしました。ソフィコちゃんの写真とお便りをいただき、可愛くてとても身近に感じました。何度も読み返しています。(里親 E・Sさん)

里親から里子への手紙

お手紙どうもありがとう。

「希望 21」での保養は初めて参加されたそうで、新しいお友達ができたり、日本の教室で指編みを楽しんだりしてよかったですね。ヴェロニカさんのよい思い出になれば私も幸せです。いま、「希望 21」であなたが皆さんと一緒に写っている写真を見ながらお返事を書いています。どうぞお元気でお暮らしてくださいね。お祈りしています。(里親 M・Eさん)

猪股さんの碁盤セット「希望 21」へ寄贈
昨年4月の里親交流会(於:東京「セシオン杉並」)にも出席された、里親の猪股さんがお亡くなりになりました。囲碁がご趣味の猪股さんは、チェルノブイリの子どもたちのために、碁盤4セットと囲碁教本(ロシア語版)4冊を寄贈してくださいました。昨年末に事務局宛にお送りくださり、御礼の電話をすると、「今は闘病生活をしています、いつか子どもたちに

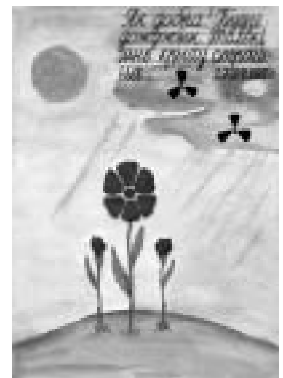
囲碁を教えに行きたいです」とおっしゃっていました。しかしその後ご家族から、お亡くなりになったというご連絡がありました。その碁盤セットを、この8月に「希望 21」へ届けることができました。「希望 21」のスタッフと子どもたちに、猪股さんのお気持ちも伝えてまいりました。ご冥福をお祈りします。

2ページに「五目並べ」をしている写真を掲載しました。

里親交流会について

関東地域の方しかご出席いただけないと思いますが、10/26(日)の「報告会」の後、飯田橋ぼらせんにて「里親交流会」を開きます。約1時間程度の予定です。報告会と合わせてご参加、お待ちしております。報告会・交流会の時間は16ページをごらんください。

N・イワン 13歳 ゴメリ市
皮膚のリンパ腫を発症。
08年8月の特別保養に参加。



絵の説明:
全部お見せできないのが残念ですが、1986.4/26のチェルノブイリ事故前・事故後、翌4/27、5/1と4枚続きの絵です。
5/1ではピンク色の花は枯れ、代わりに地面からは黒い放射能マークが現れます。

<里親募集>

いずれも甲状腺ガンの手術を受けた若い母親です。来年2009年1月から2年間、家族を支えてくださる里親を募集しています。

V・ナターシャ 1985年生まれ、娘 2006年6月生まれ ロガチョフ市

K・カーチャ 1985年生まれ、娘 2007年7月生まれ ブダ・コシェリョヴォ市

F・ナターシャ 1984年生まれ、娘 2007年11月生まれ レチツァ市

***** 募金・救援状況 *****

募金状況 2008年6月～8月

	08年6月	7月	8月
郵便振替	177件	314件	99件
現金	6件	8件	4件
救援寄付金	611,740	918,939	548,196
保養費	60,500	105,500	19,000
特別保養費	350,000	175,000	105,000
里子支援	51,920	2,438,970	311,110
医療機器支援	17,000	2,000	-
22周年救援 キャンペーン	385,000	460,000	232,000

合計(円) 1,476,160 4,100,409 1,215,306

*他に、切手 1,750 円分、商品券 6,000 円分、水出し緑茶

救援状況 2008年6月～8月

< ウクライナ >

家族の救援

・保養費	1,632,367 円
・特別保養	1,254,015 円
・運営費(08.7～12月)	405,807 円
子どもたちの生存	
・里子支援 11人(08.7～12月)	349,206 円
内分泌研究所	
・医療機器支援 超音波診断機	4,548,193 円

< ベラルーシ >

希望 21

・特別保養費(若い家族の保養含む)	1,737,305 円
困難の中の子どもたちへの希望	
・運営費	20,381 円
・里子支援 55人(08.7～12月)	1,899,975 円
・若い家族支援 3人	103,635 円
・緊急支援 1人	34,545 円
チェルノブイリのサイン	
・里子支援 14人(08.7～12月)	453,842 円
・若い家族 1人(3カ月分)	16,208 円



♥ 募金団体名一覧 ♥

紙面の都合上、個人名は省略させていただいております。多くのみなさまからご寄付をいただきました。心より感謝申し上げます。
(順不同敬称略)

【6月】

川崎とどろきロータリークラブ／情報工房スピリトン／上野原リサイクルの会／リサイクルグループ カリーナ／東用堂治療院／こどもものくに保育園／劇工房 橋の会／民宿 夢民村／食生活改善普及会

【7月】

自治労日野市職員組合／(有)エニィ タイム／三重・チェルノブイリ被曝児童救援募金／伊勢崎・佐波平和コンサート事務局／日本キリスト教協議会／一戸南小学校児童会／リサイクルグループ カリーナ／四葉会／"さよなら柏崎刈羽原発プロジェクト"有志／烏山区民センター

【8月】

ケイ歯科クリニック／東京自由保育園 子ども基金／(株)音楽センター／フェニックス証券(株)／イエス・キリスト教会 祈りの家／まほろば／NO NUKES GIG 2008／リサイクルグループ カリーナ／アロカ(株)

救援キャンペーン 報告

多くのみなさまから募金をいただきました。ありがとうございました。

07年 超音波診断装置費用 募金
(07年6月～08年9月3日まで)

収入 656件 8,276,000円

[通販生活読者募金様よりの 4,243,500円を含みます]

支出 1台目	4,211,200円
2台目	4,548,193円

08年 特別保養費用・医薬品費用 募金

収入 217件 1,166,190円

支出 特別保養費用 2,991,320円(8月までの支払分)

*企業への特別呼びかけに対しまして、フェニックス証券様、アロカ様から募金をいただきました。改めてお礼申し上げます。ありがとうございました。

差額はそれぞれ、一般寄付金から振替ました。

来年の保養費用・医薬品代、引き続き募集中!

事務局から

☆☆☆ニュース発送“ボランティア募集”☆☆☆
12/20(土)1時~5時 場所:東京ボランティア・市民活動センター(通称ぼらせん:飯田橋駅ビル セントラルプラザ10階) 発送作業を手伝っていただける方を募集しています。少しの時間でも歓迎です。参加される方は事前にメール、FAX、電話でご連絡下さい。T/F 03-5228-2680
12/27(土)~1/5(月)まで事務局は休みです。

■ボランティア作業日について

毎月第1・3土曜日の1時半~5時半 ボランティアの方と作業を行っています。作業日を変更する場合もございますので、参加される方は前日までにご連絡ください。事務局への電話は平日午前10時~午後5時半の間に、留守の場合は伝言をお願いします。

■ニュースについて

募金をくださった方には、その使われ方の報告として原則1年間お送りしています。また、ニュース購読費(2000円/年)も募っております。印刷・発送は実費の経費でまかなっておりますので、切手代とあわせても購読費以下で間に合います。残金は募金として活用させていただいております。

■ご寄付について

振替用紙を事務作業の都合などにより、一律に同封させていただいております。決して募金を強要するものではありません。なお、お払い込みいただきました募金についての領収書は、原則、団体宛ては発行しております。そのほかに必要な方は、振替用紙の「領収書必要欄」にチェックしてください。また、当基金は任意団体ですので税金控除の対象になりません。合わせてご理解くださいますようお願いいたします。

ニュースをご購読の方で転居される場合には、新住所の変更をお知らせください。その際には、旧住所もあわせてお書きください。

『みえない雲』上映会:9条フェスタ2008会場内
10/18(土)品川きゅりあん 第3講習室
13時~14時45分 主催「自然と人間社」

今号にはカレンダーチラシ、広河隆一写真展事務局ニュース、報告会チラシ(関東地域のみ)などを同封しました。

❖里親交流会のお知らせ

関東地方のみなさまには、10/26報告会のチラシを同封しました。報告会終了後、里親のみなさまと交流会を行います。これから里親になりたいと思っている方、里親制度に関心のある方などもご参加いただけます。

- ・ビデオ上映会&報告会:午後1時半~3時半
- ・里親交流会:午後3時40分~4時40分
- ・場所:東京ボランティア市民活動センター

❖“神楽坂事務局だより”ブログ開設

パソコンをお使いの方は、子ども基金のHP・最新情報よりご覧になれます。また、神楽坂事務局だよりで検索しても見ることができます。

<ブログ自己紹介より>

チェルノブイリ子ども基金事務局のある神楽坂は、しゃれたショップやレストラン、地元商店などが軒を連ねています。神楽坂通りを少し入った小路の一角から発信します。

❖編集後記

おかげさまで8月の「特別保養」が無事に終わりました。子どもたちが元気になって帰っていく姿を見て、来年もぜひ実現させたいと願っております。毎回、救援物資として多くの荷物を持ち込む際、ルフトハンザドイツ航空様に変なお世話になっています。また、今回は大きな囲碁セットを持ち込むため、駐日ベラルーシ大使館にも税関対策のご協力を頂きました。平凡社様からはこれまで「につぼにあ・ロシア語版」9冊をご寄贈いただいております(写真参照)。9月号からはさらに3冊増やしていただけることになりました。

ご協力いただきましたみなさま、ほんとうにありがとうございます。

(佐々木)



発行人 チェルノブイリ子ども基金 鈴村稔 発行日 2008年9月27日(年4回発行)
〒162-0816 東京都新宿区白銀町25 メゾンド原207号室 Tel / Fax 03-5228-2680
郵便振替口座 「チェルノブイリ子ども基金」 00160-4-98316
ウェブサイト = <http://www.smn.co.jp/chno/index.html> e-mail: chno1986@tokyo.email.ne.jp